



photo: Motoyuki Shitamichi

THE WAY I HEAR, Fuchu 2012-2013

府中市美術館の立地にまつわるリサーチをもとにしたレクチャーパフォーマンス

公開制作「OPEN STUDIO PROGRAM 57 - 日常のための練習曲/THE WAY I HEAR」
府中市美術館、東京 2012.11.23 - 2013.2.24

パフォーマー: mamoru、小野田 藍、光門 映恵
オーディオ・オペレーション: 橋本 耕平

約1時間15分ほどのレクチャーパフォーマンスは3ヶ月間にわたる公開制作期間に府中市全域で行ったリスニングと資料のリサーチを通じて書きおこされた府中市美術館の位置する公園とその周辺の歴史(米軍基地、旧帝国陸軍燃料研究施設、武蔵野原野など)にまつわるもので、サウンドスケープ・テキストの朗読とホワイトボードに書かれる文字によって主に進行していく。

幾つかのフィールドレコーディング音源やインタビューの録音音源がパフォーマンスの一部として用いられているが、それらはあくまでも補助的な要素に過ぎず、パフォーマンスにおける音要素の主要な部分はシンプルなジェスチャーとサウンドスケープ・テキストの朗読によって聴衆が想像する事で成立する。

パフォーマンスは7つサウンドスケープから成り、ソロ、デュオ、トリオと違った編成によってパフォーマンスされ、実際にリスニングによって書きおこしたものと、リサーチによってある場所、ある日、ある時間に聴こえたであろう音を書きおこしたものがあ。フィールド・リサーチ時のエピソードやキーワード、国木田独歩の「武蔵野」、民俗学者の宮本常一が府中に越して来た頃の日記、府中市議会録などその他の文献からもサウンドスケープを引用しながら場面は1898年、1941年、1968年、1971年、2012年、2013年と違う時代にまたがりつつ展開して行く。各時代の地図、古い写真なども場面を想像する手がかりとして紹介され、ホワイトボードに掲示される。

詳細: http://www.afewnotes.com/TWIH_Fuchu201213_jp.html



(パフォーマンスの冒頭部分の書きおこしから抜粋)

mamoru(以下m): なんても事はない場所ですけども、どんな音がきこえると思いますか? どうですか?

客: どこかでバイクか、自転車が通っていく

m: うんうん、ここの通りかもしれないし、向こうかもしれないし、

客: 人の話し声

m: 人の話し声

客: 鳥

m: あ、鳥。確かに。と、まあ、視ることで、きこえたのか、見えたのか、感じたのか。

実は、もう1つの方法で、始まったときから音を聴き続けてたんですけど、お気づきになりましたか?

m: さっきなんておっしゃいました? <客を指差して>

客: 鳥?

m: 鳥っておっしゃいましたね。じゃあ、その前になっておっしゃいました?

客: バイクか自転車が通る音...

m: バイクか自転車が通る音、いまきこえました?

もちろん、この画像を見てるんで、そういう音きこえてたかもなっていうのはもちろんあるんですけど、いまこの方が「鳥」と仰った瞬間に、どこかで鳥が鳴いたり、「バイクか自転車が通る音」って仰った瞬間に、その音が「再生」されませんでしたか?

つまり「口述」と言うか、人の話し、を、聞くことによって、「音」が再生される

画像を見て想像する音、人の話しから想像する音、文字を読む事で想像する音、そういったものも「音」と解釈して、今回のパフォーマンスは考えてみました。



(パフォーマンス途中のデュオ部分より抜粋)

パフォーマー: 小野田 藍(O), mamoru(m)

m: 2012年12月23日日曜日 くもり、微風、辺りは冷え冷えとしている 11時7分リスニングスタート

m: すぐわきの通りを 車が通りすぎる

m: 近くから 鳥の鳴き声

m: 離れたところから 男性の"おはようございます"、"失礼しまーす"という声が響く

m: 11時10分 少し離れたところで 車のエンジンがかかる

O: 近くで"ピーッピーッピーッ"と車がバックする

m+O: 目の前を 車が横切る

m: その車が停止し ドアが開き、閉められる

O: 上空で とどろき鳥の音が響く

...(継続)...



(パフォーマンス終盤より抜粋)

パフォーマー: mamoru(m)

オーディオオペレーター: 橋本 耕平(H)

m: その昔、この辺りには古多摩川、が流れていた、その川床が窪地となって、周囲のわき水、時折の大雨、それらがたまっぴとつの水の流れを作っていた
その流れはだいたいこの刑務所の辺りからはじまって、天神町のあたりを通る

そういえば、天神町で生まれ育ったあの人もその流れを視たと言っていた

<H: インタビュー音源再生>

「もうこの辺もね木がいっぱいあって、水が湧いてて、私の家のほうにこう、細い、川とも言えないけど、水が流れてたんですよ、谷になっててね、台風になると小川がでちゃう」

m: その流れは「留保地」を抜け、浅間山の南側をぬけていく
あの人がきいたと言っていたその音もそうだろうか

<H: インタビュー音源再生>

「浅間山のこころへんから水が湧き出てるのはご存知ですか？そこを、その川がだから、そこから出てる小川がこの辺流れ立てたのは覚えています」



m: 私はそのドアを出て、エントランスの方へ向かい、美術館を出て、すぐ右わきの道路をわたり、目の前にあるフェンスをのり越え、草むらを分け入り、右手に廃墟をみながら、奥へ奥へ、古びたコンクリートの道をいった。
雑木林へ入っていき、周囲を見渡して、耳を傾けた

m: 遠くで(小金井街道の方)車の通る音、すぐ後ろで、木から何か落ちる音

どこからか犬の鳴き声

上空を飛行機が通過する

風が通り抜ける、木々が揺れる

雨が降り始め、樹々にあたる、あたりの落ち葉にあたる

辺り一帯、鳥の鳴き声

<ゆっくりと身振り>

目の前に、水の流れ

<時計で時刻を確認する>

2013年2月16日16時15分、リスニング終了